

奥村 哲編

『変革期の基層社会——総力戦と中国・日本——』

創土社 二〇一三・二刊

A5 三〇二頁 三〇〇〇円

本書は、中国の「伝統社会」が近代以降どのような変容を経て現在に至ったのかという大きな問題関心のもとで、中国基層社会史研究会が進めてきた共同研究の成果である。日中戦争・国共内戦・東西冷戦の各時期の農民と農村社会が本書の主要検討課題である。「総論」と個別論文八章から構成されている。

奥村哲「総論」は、当該研究会の活動経緯、課題や方法を示す。原田敬一「アジア太平洋戦争下日本の都市と農村」は、アジア太平洋戦争という大きな強制力によって日本の都市と農村が如何に変化したのか、それを解明するために、日清戦争以降を射程として徴兵システムや軍事後援会、村財政、都市制度、町内会など五つのテーマから検討する。

笹川裕史「戦後中国における兵士と社会」は、日中戦争期に最も重い戦時負担が強いられた四川省を対象に、日中戦争の退役軍人及び国共内戦の出征軍人の家族と、彼らに対する社会的支援問題をとり上げ、その問題点と限界を指摘する。

王友明「建国前の土地改革と民衆運動」は、山東省莒南県を事例に日中戦争期の減租減息運動を含む土地改革を分析する。中国共産党の土地改革は民衆動員において一定の役割を果たしたものの、一連の動員方式・技術や組織的コントロールの有機的な組み合わせが必要であったことを強調する。

呉毅・呉帆「伝統の転換と再転換」は、土地改革における農民の心性、とりわけ土地に対する心性を分析対象とし、農民の土地に対する心性の本来のあり方、土地改革による変化と促進のメカニズム、土地改革以降の歴史との関連性について検討する。

山本真「一九五〇年代初頭、福建省における農村変革と地域社会」は、共産党政権が農村社会を掌握する過程を明らかにするため、福建省を対象として一九五〇年代の土地改革が宗族意識に与えた影響と土地改革後の宗族結合の実態を分析する。

野田公夫「土地改革の時代」と日本農地改革」は、中国の土地改革の特徴をより鮮明にするために同時期の他地域の土地改革と比較する。東北アジア型、東欧型、中国型という三つの類型を提示した上で、日本の農地改革について考察を行っている。

丸田孝志「中国共産党根拠地の権力と毛沢東像」は、毛沢東像の使用がより顕著である冀魯豫区を分析対象とし、その使用状況の分析から中国の政治動員における象徴的作用と共産党権威の強調の手法について検討する。

泉谷陽子「抗米援朝運動の広がりと深化について」は、抗米援朝運動を構成する各運動は形式主義、ノルマ主義、上からの動員、さらに、地域的不均衡や属性的不均衡などの問題を抱えていたこと、大衆動員運動に過ぎなかったことを指摘する。

本書は、各時期・中国各地域の基層社会に目を向け、農民と農村社会、国家と農民などの関係の一端を明らかにし、さらに比較

史の視点を取り入れたことによってより中国の多元性を具体化したことが大きな特徴であり、関連研究分野の研究者にとって示唆に富む論文集である。

(菅野智博)